

ホエール・ウォッチング

——小さな捕鯨の島・ベクウェイ島の厄介な問題——

浜 口 尚

Abstract: Since 1987, the harvesting of humpback whales by the Bequians of St. Vincent and the Grenadines has been approved by the International Whaling Commission (IWC) as a form of “aboriginal subsistence whaling.” However, in 2012 a non-profit organization launched an anti-whaling and pro-whale watching campaign. In this paper, I would like to take up issues that have resulted from the whale watching movement, and to offer a perspective on the future of whaling in Bequia.

はじめに

2014年2月のある日、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国（以下、「セント・ヴィンセント国」と表記）ベクウェイ島において、1996年以降2013年までの18年間、自らの捕鯨チームを率いてきた鯨捕りAは、捕鯨ボートを2年前から同島での捕鯨をホエール・ウォッチングに転換する運動を始めた団体、「セント・ヴィンセント国ナショナル・トラスト」（St. Vincent and the Grenadines National Trust）¹⁾（以下、「SVGNT」と表記）に売却、捕鯨業から引退した。

過去18年間にザトウクジラ11頭を捕殺し、現存する銚手では最大の捕殺数を誇る人物の決断は、捕鯨の伝統を持つ地域に少なからぬ波紋を引き起こした。1991年以降、ベクウェイ島の捕鯨について彼から多くを学び、また彼と共に捕鯨の航海に出かけた経験のある筆者にとっても、この事態は予期しておらず、驚きであった²⁾。

以下、本稿においては、ベクウェイ島の捕鯨における中核人物であったこの銚手の転身を取り巻く諸状況について報告、考察する。

1. ホエール・ウォッチングへの道

ベクウェイ島のザトウクジラ捕鯨は、1875–76年頃にアメリカ帆船式捕鯨から捕鯨技術を習得したベクウェイ島民によって創始された（Adams 1971: 60）。このザトウクジラ捕鯨は、1987年に開催された第39回国際捕鯨委員会年次会議において「先住民生存捕鯨」（aboriginal subsistence

whaling)として承認され、3年間の年間捕殺枠3頭が付与された(IWC 1988: 21, 31)。それ以降、バクウェイ島のザトウクジラ捕鯨については、捕殺枠の更新時ごとに捕殺対象や捕鯨方法をめぐって国際捕鯨委員会において議論が繰り返されてきた(浜口 2012: 90-100)。最新の捕殺枠は、2012年7月に開催された第64回国際捕鯨委員会年次会議において承認された「2013年から2018年までの漁期中に24頭を超えてはならない」(IWC 2013: 21, 152)である。

ところが、その第64回国際捕鯨委員会年次会議の場で、SVGNTの理事長を務める人物が他団体「環境認識のための東カリブ海地域連合」(Eastern Caribbean Coalition for Environmental Awareness)を代表して、次のような見解を表明した。すなわち、バクウェイ島のザトウクジラ捕鯨は、アメリカ帆船式捕鯨から技術を学んで創業された捕鯨であり、現在ではイギリス、フランスからの入植者の子孫によって実施されている。それ故、先住民生存捕鯨ではなく、その捕殺枠は取り消されるべきである³⁾(IWC 2013: 20-21)。SVGNT理事長はバクウェイ島出身で、セント・ヴィンセント国元首相の次女、加えて法律事務所を主宰する弁護士である。そのプレゼンテーションにはそれなりのインパクトがあった。

ちなみにSVGNT理事長の父、元首相が首相在職時の1987年にセント・ヴィンセント国はバクウェイ島のザトウクジラ捕鯨について、国際捕鯨委員会に先住民生存捕鯨としての捕殺枠を要求し、承認されたのであった。また、元首相はバクウェイ島における捕鯨事業創始者の玄孫にあたる(see Mitchell 2006: photo 2, 3, 6; Ward 1995: back cover)。ということは、SVGNT理事長は創業5世代目になる。そういう人物の突然の宗旨替えであった。

SVGNT理事長によれば、彼女が小学生の頃、ザトウクジラが捕殺された時には小学校も休みとなり、彼女もプティ・ネイヴィス島にあった鯨体処理施設に解体見物に出かけ、祝祭を楽しんだ。当時、捕鯨は島全体の文化であった。ところが、鯨体処理施設が2003年にプティ・ネイヴィス島からサンプル・ケイに移設されて以降⁴⁾、立地場所の狭小さのため、多くの人々が解体見物に出かけることが困難となり、捕鯨は関係者だけの事業となった。捕鯨が島全体の文化でなくなった以上、彼女なりに捕鯨中止を求めてもよい理由が存するのである。

第64回国際捕鯨委員会年次会議以降、そのSVGNT理事長は、バクウェイ島での捕鯨のホエール・ウォッチングへの転換をめざして、早速運動を活発化させていく。

2012年11月、SVGNTは、バクウェイ島で捕鯨が実施されている2地区のうちの一つ、P地区のコミュニティ・センターにおいて、地元住民を対象としてホエール・ウォッチングに関する意見交換会を開催した(現地で聞いた話では、この意見交換会における地元住民の反応は、SVGNT理事長にとって芳しいものではなかった。総スカンであったと語る人物もいた)。

2013年3月、SVGNTは、バクウェイ島の元鯨捕りB(後述するXが捕鯨ボート所有者兼鉗手を務める捕鯨チームの一員であった)を含むバクウェイ島の住民4人と農水省の役人1人⁵⁾を、ホエール・ウォッチングを体験させるためにドミニカ共和国へ派遣した。この派遣費用はSVGNTが負担した(この費用負担については、2014年3月に面談したSVGNT理事長本人から確認した)⁶⁾。Bによれば、同国では3種類のホエール・ウォッチングを体験したほか、ホエー

ル・ウォッチング事業関係者とも面談し、関連情報を収集した。

そして、2013年5月、SVGNTは、3月にドミニカ共和国へ派遣したBと農水省の役人に加えて、当時は現役の捕鯨ボート所有者兼鉬手であったAの3人を、オーストラリア、ブリズベンにおいて国際捕鯨委員会により主催されたホエール・ウォッチング事業者向けのワークショップへの参加を斡旋した。AおよびBに確認したところ、2人とも旅費は一切負担しておらず、旅費については「国際捕鯨委員会が負担した」(A)、「オーストラリア政府か、アメリカ合衆国政府が負担したと思う」(B)との答えであった。本件旅費負担についてSVGNT理事長に尋ねたところ、「旅費は国際捕鯨委員会が負担した」との回答であった。後日、国際捕鯨委員会の下部組織である科学委員会の報告書を読んだところ、このワークショップは「オーストラリア政府およびアメリカ合衆国政府の資金提供を受け、開催された」(IWC 2014: 54)との記載があった。Bの理解が真実に近いのであろう。

本件オーストラリア訪問について、Aは「ワークショップに鉬手として参加するのはまずいので、漁師兼大工として自己紹介しておいた。彼の地ではショッピングを楽しんできた」と自らの決断へのワークショップの影響はなかった旨を筆者に語ってくれた(実際、悪天候のため、現地において予定されていたホエール・ウォッチングは全て中止となった)。この発言からオーストラリア訪問当時、Aは捕鯨業の継続に十分意欲を持っていたとみなしうるが、あるいはホエール・ウォッチング事業について何らかのインスピレーションを得てきたのかもしれない。このオーストラリア訪問がAの捕鯨業からの引退に何らかの影響を与えたとするならば、SVGNT理事長の作戦勝ちである。

2. バクウェイ島の捕鯨の現状と鯨捕りAの決断

AがSVGNTに売却した捕鯨ボート*Rescue*(写真1)は、1995年にAと当時健在であった彼の父の2人が建造を始め、翌1996年からAはこの*Rescue*に乗り捕鯨事業に参画、1998年にザトウクジラ2頭の捕殺に成功し、1994年から1997年までの4年間捕殺ゼロに終わり、絶滅の危機に瀕していたバクウェイ島のザトウクジラ捕鯨を文字どおり救出(rescue)した伝統ある捕鯨ボートであった(浜口1998)。

2012年8月に筆者がAに会った際には、彼はバクウェイ島において捕鯨のホエール・ウォッチングへの転換運動を開始したばかりのSVGNTおよびその理事長について批判的に話していた。それから1年半余りの間に彼に何が起こったのであろうか。

2014年3月にバクウェイ島を訪問した筆者は、Aに何故、捕鯨ボートをSVGNTに売却し、捕鯨業から引退したのかを尋ねた。彼が説明した理由の一つは、バクウェイ島の捕鯨に団結・統制がなくなったことであった。直接的には2013年漁期におけるAの捕鯨チームとXの捕鯨チームとの諍いである。Aが2013年4月13日に同年漁期最後のザトウクジラ1頭を鉬打ちし、仕留めた時、Aの捕鯨ボートが鉬打ち態勢に入っていたにもかかわらず、Yが交替鉬手を務め



写真1 捕鯨ボート *Rescue* (2005年)



写真2 同じザトウクジラ(中央)を狙う銚手 A (右)と銚手 Y (左) (2013年)

る X の捕鯨ボートがかなり接近してきた。セント・ヴィンセント国の捕鯨規則によれば、この状況下では A の捕鯨ボートに銚打ちの優先権がある⁸⁾。この規則を無視して、X の捕鯨ボートが銚打ち態勢に入りかけたことに A は立腹していた。この海上での出来事を、たまたま陸上から写真に収めた人物がおり(写真2)⁹⁾、その写真を入手した A は、X に写真を見せて抗議、その結果、2014 年漁期から Y は X の捕鯨チームから独立することになったのである。

結果として、2013 年漁期は両チームが2頭ずつザトウクジラを仕留めた形となっているが、X の捕鯨チームは X が銚手として捕鯨ボートに乗船していない時に、交替銚手の Y が2頭を仕留めている。A によれば、X の捕鯨チームには銚手が2人いるので、他の乗組員は誰の命令を聞くべきかに関して混乱をきたしている。それが、上述のような規則無視が起こることの原因の一つであるとのことであった。この3人の銚手 A、X、Y をめぐる複雑な関係を理解するには、バクウェイ島の捕鯨の歴史を少し遡ってみる必要がある。

1950 年代の終わり頃からバクウェイ島の捕鯨は、銚手アスニール・オリヴィエール(1921-2000 年)によって率いられてきた。彼は 2000 年に 79 歳で死去する直前まで捕鯨ボートに乗り続け、後継者の育成に努めてきた¹⁰⁾。A (1955 年生まれ)、X (1950 年生まれ)、Y (1958 年生まれ) の3人もアスニールから捕鯨の手ほどきを受けている。

A は 1991-92 年、アスニールの捕鯨ボート *Why Ask* のタブ・オールズマン、1993 年はボウ・オールズマンを務め¹¹⁾、1996 年に自らの捕鯨ボート *Rescue* の銚手として独立を果している。X は 1996-97 年、*Why Ask* のキャプテン、1998 年はボウ・オールズマンを務め、2000 年に漁船を改装した自らの捕鯨ボート *Perseverance* (写真3) の銚手として独立した。一方、Y は 1996-97 年、A の捕鯨ボート *Rescue* のボウ・オールズマン、1998 年には *Why Ask* の交替銚手を務め、近年は X の捕鯨ボート *Perseverance* の交替銚手を務めていた。そして 2014 年に、自らの捕鯨ボート *Persecution* (写真4) の銚手として独立したのであった。

1997 年 3 月 22 日に筆者が A の捕鯨ボートに乗り、捕鯨航海に同行した際、その日はたまたま Y はカゼで出漁できず、X が代わりにボウ・オールズマンを務めていた(同日、*Why Ask* は



写真3 捕鯨ボート *Perseverance* (2014年)



写真4 捕鯨ボート *Persecution* (2014年)

出漁せず)。翌1998年にAに会った際、Aは筆者に「Yと諍いがあったため、今後は自らの捕鯨ボートにYを乗せない」と語っていた(AとYとの確執は昨日、今日に始まったものではないのである)。同年、アスニールはXを*Why Ask*の交替鉾手に推したが、他のクルーがYを推し、結局Yが交替鉾手を務めたという経緯もある。アスニールの下で3人は鯨捕りとして力をつけ、時には反目しながら、鉾手としての腕を磨いていったのであった。

アスニールの健在時、彼は偉大なる鉾手としてバクウェイ島全体のヒーローであり、彼の下でバクウェイ島の鯨捕りたちには団結・統制があった。アスニール亡き後も2003年から2010年漁期まではAの捕鯨チームとXの捕鯨チームは共同事業を営んでいた。すなわち、どちらの捕鯨チームがザトウクジラを捕殺しても対等にシェアを分配するという形がとられていた¹²⁾。ところが、2011年漁期から両チームは別個に事業を営むようになった。両チームの関係は協力・協調から、鯨をめぐる競合・競争へと変わったのである。

何故、競合・競争へと変わったのであろうか。Aは2000-10年漁期にザトウクジラを6頭捕殺し、Xは同漁期に7頭捕殺している(表1)。近年、2人の鉾手は大体同程度の力量を持つようになった。Aはバクウェイ島のQ地区に住み、XはP地区に住んでいる。Aが捕殺に成功すれば、彼はQ地区のヒーローであり、Xが捕殺に成功した時には、彼がP地区のヒーローとなる。隣接する狭い2地区に2人のヒーローは共存しにくい。両雄、相並び立たずである。ヒーローの活躍を求める地元の声が、2人に対する無言の圧力となったことは、想像に難くない。それだからこそ、Xは自分が出漁しない時には、自らの捕鯨ボートに交替鉾手のYを乗せ始めたのである。

Aにとって2013年漁期はXの捕鯨チームと鯨をめぐる競合し、2014年漁期からは新たにYの捕鯨チームも加わり、鯨をめぐる競争は一層厳しくなる。鯨捕り間に団結・統制がなくなり、捕鯨に負担(疲労)を感じ始めたAに、SVGNT理事長がそれなりの金額を提示して¹³⁾、

表1 ベクウェイ島、銚手別ザトウクジラ捕殺数一覧ー1991ー2013年ー

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
A	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	2
X	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
Y	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Athneal Ollivierre	-	1	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Athneal's adopted son	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	(計)
A	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	2	11
X	1	-	-	1	1	1	-	1	-	1	-	8
Y	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2	4
Athneal Ollivierre	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
Athneal's adopted son	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1

[出典：筆者の調査]

捕鯨ボートの買収を申し入れたのは、彼にとって渡りに船だったのかもしれない。2009年漁期から3男（1987年生まれ）を後継者とすべく、時に代替乗組員として捕鯨に同行させていたAであったが、その3男の反対にもかかわらず、捕鯨ボートを売却したのであった。

3. ベクウェイ島の捕鯨の将来

目下のところ、ベクウェイ島の捕鯨をホエール・ウォッチングに転換するという SVGNT の計略は着々と進んでいる。特に、A の捕鯨ボート *Rescue* を購入できたことは大きな成果であった。SVGNT 理事長は、この *Rescue* を過去の遺物とすべく、2013年に開設された「ベクウェイ島ボート博物館」(Bequia Boat Museum) (写真5) に、同ボートの寄付を申し出ている¹⁴⁾。これでベクウェイ島において捕鯨が実施されていた2地区 (P地区、Q地区) のうち、Q地区には捕鯨ボートが存在しなくなった。2014年漁期、Xの捕鯨チームからYが独立し、結果として捕鯨チームが2チーム存在している状態に変わりはないが、捕鯨実施地区は狭められた。

また、Aの捕鯨ボート *Rescue* は、ベクウェイ島において伝統的に用いられてきたナンタケット型捕鯨ボートの最後のボートである (写真1)¹⁵⁾。これに対してXの捕鯨ボート *Perseverance* は、木造漁船にグラスファイバーを被覆して捕鯨ボートに改装したもの (写真3)、Yの捕鯨ボート *Persecution* も木造漁船に防水繊維シートを被覆して捕鯨ボートに改装したものである (写真4)。XもYも木造漁船に



写真5 ベクウェイ島ボート博物館 (2014年)

表2 ベクウェイ島、捕鯨ボート別ザトウクジラ捕殺数一覧—1991–2013年—

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
<i>Why Ask</i>	0	1	2	0	0	0	0	0	1	1	0	—
<i>Rescue</i>	—	—	—	—	—	0	0	2	1	1	0	2
<i>Perseverance</i>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	2	0
	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	(計)
<i>Why Ask</i>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
<i>Rescue</i>	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	2	11
<i>Perseverance</i>	1	0	0	1	1	1	0	2	1	1	2	12

[出典：筆者の調査]

グラスファイバーや防水繊維シートを被覆することにより、捕鯨ボートの耐久性は増加したと語っている。この小さな現代技術の採用が、現在のベクウェイ島の捕鯨は旧来の先住民生存捕鯨とは異なる状況にあるとして、反捕鯨団体に同島の捕鯨を批判する材料の一つを与えることになるかもしれないのである¹⁶⁾。

Xの捕鯨チーム(*Perseverance*)は2000–13年漁期に12頭のザトウクジラを捕殺している(表2)。このうち、Xが鉤打ちしたのが8頭、Yが鉤打ちしたのが4頭である(表1)。しかしながら、直近5年に限れば、Yが4頭、Xが2頭とその立場は逆転する(表1)。今後は、1958年生まれでXよりも8歳若いYが、捕鯨事業の中核を担っていくはずである。Yは30歳代の若い世代を捕鯨ボートに乗せ、後継者を育成しようとしている。また、Yに抜けられたXも別の交替鉤手を確保した。この2チームが競い合っていけば、当面ベクウェイ島の捕鯨は安泰であろう。

この2人はホエール・ウォッチングについて、それぞれ次のように語っている。「ホエール・ウォッチングについては特に反対ではない。やりたいのであるならば、やればよい。私たちは捕鯨を行う。ザトウクジラは通過するだけであり、次に現われるのは2、3週間後かもしれない。そんな所にホエール・ウォッチング客が来るのかなあ…」(X)

「P地区では誰もホエール・ウォッチングを支持しない。Bだけである。ホエール・ウォッチングは地元にお金を落とさない。鯨が獲れば、住民は鯨肉を食べられるだけでなく、[解体を見物に行く]ボート、[見物客を運ぶ]タクシー、[鯨が獲れたことを祝うパーティーで用いる飲食物を取り扱う]スーパーなどの間で、お金が循環する」(Y、[]内、筆者付記)

この2人からは、捕鯨の文化、伝統を守ろうと肩肘を張っている姿ではなく、淡々と、しかしながら自信を持って捕鯨を続けていこうとする姿を見てとることができた。

これに対して、SVGNT理事長は、「10–15年後にはベクウェイ島から捕鯨は消えているであろう」と中長期的に運動の成功を確信していた。「年間捕殺枠4頭という現在の小規模捕鯨は、ベクウェイ島およびセント・ヴィンセント国にとって大きな問題ではないが、観光業にとっては有害。捕鯨を中止すれば、もっと鯨がやってくる。観光客も」。「捕鯨とホエール・ウォッチングは両立すると考えるが、捕鯨はないほうがもっとよい」。このような発言から、声高に反捕鯨を叫

ぶよりは少しずつホエール・ウォッチングへの流れを作っていこうとする SVGNT 理事長の戦略を読み取ることができる。

また、ホエール・ウォッチングの実施手法について、SVGNT 理事長は「新たに創業するというよりはクルージングなど観光用の船を保有する既存のツアー・オペレーターと協力するのが現実的である」と語り、ホエール・ウォッチング船に新規投資をせずにホエール・ウォッチングを開始する方法を考えている。

さらに、「[元鯨捕りの] A も B もホエール・ウォッチングの最高の語り手である。彼らがホエール・ウォッチング船に乗り、鯨や捕鯨について語ったならば、ホエール・ウォッチング客は、たとえ鯨に出会わなかったとしても、満足するであろう」。「彼らには鳥類についても勉強してもらっている。ホエール・ウォッチング・ツアー時に、海鳥について話ができるようになれば、なおよい」とも語り、定住鯨ではないザトウクジラを対象とするホエール・ウォッチング事業の危機回避対策（鯨に遭遇しなかった場合の対応策）も考えている。なかなかの策士である。

ドミニカ共和国へのホエール・ウォッチング見学ツアーに参加した B は「ホエール・ウォッチングは雇用をもたらす。ドミニカ共和国は現在、ホエール・ウォッチングがブーム。[ホエール・ウォッチングの中心地サマナに向かうのに便利な] 新国際空港もできた。これに対してベクウェイ島の観光は停滞している」と語り、ホエール・ウォッチングによりベクウェイ島の観光開発が進展し、経済的に潤うことに期待を寄せている。

「ドミニカ共和国の公用語はスペイン語ではないのか」という筆者の質問に対して、B は「観光地では英語が通じる。それにホエール・ウォッチングはアメリカ人が運営している事業も多い」と答えてくれた。「それならば、ホエール・ウォッチングによる収益はアメリカ人に持っていかれるのでは…」と質問しようと思ったが、B のロマンを壊したくないので差し控えた。ベクウェイ島においてホエール・ウォッチング事業が実施されるようになったとしても、島外への経済的漏出を防ぐ仕組みが必要であろう。ロマンだけでは地元で金が落ちない¹⁷⁾。

一方、A は筆者に対して「誰かがホエール・ウォッチング船を提供し、船長をやれというのであるならば、船長兼レポーターをやるかもしれない」と半分冗談、半分本気で語ってくれた。あるいはホエール・ウォッチングに新たなビジネス・チャンスを見出したのかもしれない。20年以上、A とつき合ってきた筆者にとって、彼の捕鯨業からの引退は正直、衝撃であった。筆者にとって、彼の転身を理解するにはもう少し時間が必要なのかもしれない。

お わ り に

1991 年からベクウェイ島において捕鯨文化の調査を始めた筆者もそろそろ還暦が近くなった。「10-15 年後にはベクウェイ島から捕鯨は消えているであろう」とする SVGNT 理事長の予言の結末をこの目で見てみたい気もするが、それは体力的に少々きついかもかもしれない。当面の課題は、来年（2015 年）の還暦には現地を訪れ、ホエール・ウォッチング事業が始まっているか否

か、A と B がホエール・ウォッチング事業に参画しているか否か、についてこの目で確かめ、本稿の続編を書くことである。まだまだやるべき仕事は残されている。

付記

本稿の一部は日本セトロジー研究会第 25 回大会（2014 年 5 月 25 日、愛媛大学）において口頭発表したものである。当日貴重なコメントを提供して下さった参加者の方々に記して謝意を表します。また、本研究は平成 25 年度日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究（C）課題番号 25370957「現代社会における先住民生存捕鯨の社会文化的意義」（研究代表者・浜口尚）の助成を受けています。

注

- 1) セント・ヴィンセント国ナショナル・トラストは、1969 年 10 月 25 日に施行された『セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ナショナル・トラスト法』（*Saint Vincent and the Grenadines National Trust Act*）（以下、『ナショナル・トラスト法』と表記）の規定に基づいて設立された非営利団体である。
- 2) 筆者は、1991 年から 2014 年にかけて、ベクウェイ島およびセント・ヴィンセント島において、捕鯨文化関連の現地調査を計 12 回、約 3 か月半、実施した。
- 3) アメリカの反捕鯨団体「動物福祉協会」（Animal Welfare Institute）は、第 64 回国際捕鯨委員会年次会議を間近に控えた 2012 年 6 月、ベクウェイ島の先住民生存捕鯨の継続に反対する報告書（AWI 2012）を発表している。SVGNT 理事長の年次会議における反捕鯨プレゼンテーションは、同報告書に依拠したものである（“Whaling in Bequia: Not ‘Aboriginal’…Learned from Yankees.” 〈<http://iwcblogger.wordpress.com/2012/07/04/whaling-in-bequia-not-aboriginal-learned-from-yankees/>〉 Accessed September 2, 2012）。
- 4) 2002 年まで捕殺されたザトウクジラの解体処理は、ベクウェイ島から船で 10 分程度の距離にあるプティ・ネイヴィス島の鯨体処理施設で行われていた。この施設および敷地は、銛手アスニール・オリヴィエールほか兄弟（およびその相続人が）が共有していたが、アスニールの死後、土地の相続問題がこじれ、2003 年以降プティ・ネイヴィス島の鯨体処理施設の使用は不可能となった。このため、捕鯨関係者は、ベクウェイ島から船で 2 分程度の小島サンプル・ケイ（国有地）に、日本から「草の根無償資金協力」を得て、新たに鯨体処理施設を建築した（浜口 2013: 263-271）。
- 5) この農水省の役人とは、「農業・水産業と観光業との結びつきを促進することをめざして、農水省内に新たに設置された特別な部門の長」である（“Bequia delegation on whale watching mission to Dominican Republic.” *Searchlight*, March 15, 2013. 〈<http://searchlight.vc/Bequia-delegation-on-whale-watching-mission-to-dominican-republic-p43564-82.htm>〉 Accessed April 19, 2013）。その職務から、ホエール・ウォッチング事業を担当していると考えられる。
- 6) SVGNT の資金源については、同団体のホームページに次のような記述がある。「SVGNT は、この海洋資源 [北大西洋ザトウクジラ] の非致命的利用を促進するプロジェクトを展開しています。おおよそ 2 万 8500 米ドルと見積もられているこのプロジェクトは、SVGNT の成員と協力者たち (friends) によって資金提供がなされています。このプロジェクトは、ベクウェイ島の捕鯨コミュニティと協力して、ホエール・ウォッチングが経済的に見込みのある代替生計手段であることの立証をめざしています」 (“The National Trust’s Plan to Save SVG’s Humpback Whales.” 〈<http://svgnationaltrust.moonfruit.com/#/humpback-whales/4568202208>〉 Accessed November 13, 2013) [下線筆者]。この資金提供を行っている協力者たちについて調べるのが、今後の課題である。
- 7) International Whaling Commission and its Working Group on Whale Watching, “Whale Watch Operators Workshop” (May 24–25, 2013, Brisbane, Australia).
- 8) セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国『先住民生存捕鯨規則 2003』（*Aboriginal Subsistence*

- Whaling Regulations, 2003*) 第7条第1項において、「もし1頭の鯨が、海岸あるいは海上の2捕鯨チーム、もしくはそれ以上の捕鯨チームによって発見され、それらの捕鯨チームが追跡を始めたならば、最初に鯨から最短距離に近づいた捕鯨ボートに鉾打ちの優先権がある」と規定されている。
- 9) 写真2は、Aが入手した写真を、筆者がA宅において複写したものである。
 - 10) 筆者は以前、偉大なる鉾手アスニール・オリヴィエールを追悼する論文を書いたことがある (see Hamaguchi 2001)。
 - 11) ベクウェイ島の捕鯨ボートには通常、6人が乗り組む。先頭から順番に「鉾手」「ボウオールズ・マン」「ミッドシップ・マン」「タブ・オールズマン」「リーディングオールズ・マン」「キャプテン」である。鉾手は捕鯨のリーダーであり、鯨の捕殺に関して絶対的な権限を有している。キャプテンはボートの操船に関しての全責任を担っている。一方、ボウオールズ・マンは見習い鉾手に相当し、鉾手の背後で彼の指示を受けながら、鉾打ちの技術を学ぶ。各人の役割の詳細については、浜口(2013: 254-256)を参照のこと。
 - 12) ベクウェイ島の捕鯨においては、捕殺されたザトウクジラの肉、脂皮などの鯨産物は、伝統的にシェア・システムによって分配がなされてきた。2001年以降は、捕鯨ボートの所有者に2シェア、捕鯨ボートの乗組員に1シェアという形で鯨産物の分配がなされている (浜口 2013: 260)。
 - 13) 筆者は、Aから捕鯨ボートを SVGNT に売却したこと、および SVGNT 理事長から捕鯨ボートを A から購入したことを直接確認したが、その金額については聞いていない。将来、SVGNT の決算書を読めば、その金額がわかるかもしれない。『ナショナル・トラスト法』第11条において、「本トラストを代表して受領、支出した金銭の完全かつ適切な決算書を作成し、毎年適切な時期に決算書を会計検査官に提出することが理事会の義務である」と年1回の決算書の提出義務が規定されている。
 - 14) ベクウェイ島ボート博物館を管理運営する「ベクウェイ島遺産財団」(Bequia Heritage Foundation) の理事長によれば、ある日突然、SVGNT 理事長から同氏に電話で「SVGNT が、捕鯨ボート *Rescue* を購入したので、博物館に寄付したい」との申し出があった。SVGNT 理事長自身もベクウェイ島遺産財団の理事ではあるが、*Rescue* の受け入れなどについて、理事会において議論したことは一度もなかった。今後、*Rescue* の受け入れの是非について、理事会で話し合われることになるが、SVGNT 理事長の母が同財団の理事・事務局長であることに加えて、同理事長は他の理事にも影響力を持っているので、*Rescue* の寄付の申し出を拒否することはできないであろうとのことであった。
 - 15) 「ナンタケット」(Nantucket) とは、アメリカ合衆国マサチューセッツ州の沖合に位置する島の名前である。かつてナンタケット島は、アメリカ帆船式捕鯨の中心地であった (森田 1994: 57)。ベクウェイ島のザトウクジラ捕鯨は、アメリカ帆船式捕鯨から捕鯨技術を習得した島民により創始された。捕鯨ボートについてもナンタケット型捕鯨ボートを模して製作された (Adams 1971: 60, 63)。
 - 16) 例えば、アメリカの反捕鯨団体、動物福祉協会はベクウェイ島の捕鯨における高速モーターボートの使用を、先住民生存捕鯨から逸脱するものとして批判している (AWI 2012: 6)。
 - 17) SVGNT 理事長の姉(長女)と母は、ベクウェイ島において別個にホテル・レストラン事業を営んでいる。ベクウェイ島でホエール・ウォッチングが盛んになり、観光客が増加すれば、ホテル・レストラン事業を営む彼女の一族は潤うであろう。

文献

Adams, John Edward

1971 Historical Geography of Whaling in Bequia Island, West Indies. *Caribbean Studies* 11(3): 55-74.

Animal Welfare Institute (AWI)

2012 *Humpback Whaling in Bequia, St Vincent and the Grenadines: the IWC's Failed Responsibility*. 19 pp.

〈<http://awionline.org/sites/default/files/uploads/documents/SVGReport072012.pdf>〉 Accessed September 12, 2012.

浜口 尚

- 1998 「絶滅の危機を救った捕鯨ボート『レスキュー』-カリブ海ベクウェイ島の捕鯨の現在-」『鯨研通信』400: 12-20.
- 2012 「カリブ海・ベクウェイ島における先住民生存捕鯨」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』東京：成山堂書店、83-101頁。
- 2013 『先住民生存捕鯨再考-国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に-』博士学位請求論文、総合研究大学院大学、389頁。

Hamaguchi, Hisashi

- 2001 Bequia Whaling Revisited: To the Memory of the Late Mr. Athneal Ollivierre. *Sonoda Journal* 36: 41-57.

International Whaling Commission (IWC)

- 1988 Chairman's Report of the Thirty-Ninth Annual Meeting. *Report of the International Whaling Commission* 38: 10-31.
- 2013 Chair's Report of the 64th Annual Meeting. *Annual Report of the International Whaling Commission 2012*: 7-152.
- 2014 Report of the Scientific Committee. *Journal of Cetacean Research and Management* 15 (Suppl.): 1-76.

Mitchell, James

- 2006 *Beyond the Islands: An Autobiography*. Cambridge: Macmillan.

森田勝昭

- 1994 『鯨と捕鯨の文化史』名古屋：名古屋大学出版会。

Ward, Nathalie F. R.

- 1995 *Blows, Mon, Blow!: A History of Bequia Whaling*. Woods Hole, MA: Gecko Productions.

[はまぐち ひさし 文化人類学]